高橋昌男

螢籠

ほたるかご

新潮社

虫籠（ほたるかご）

高橋昌男

新潮社

螢籠

一九九五年四月三〇日　発行

著者　高橋昌男

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

東京都新宿区矢来町七一　郵便番号一六二
編集部　東京03三六六一五四一一
読者係　東京03三六六一五一一一
電話
振替　〇〇一四〇一五一八〇八

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

©Masao Takahashi 1995, Printed in Japan

ISBN4-10-325604-4 C0093

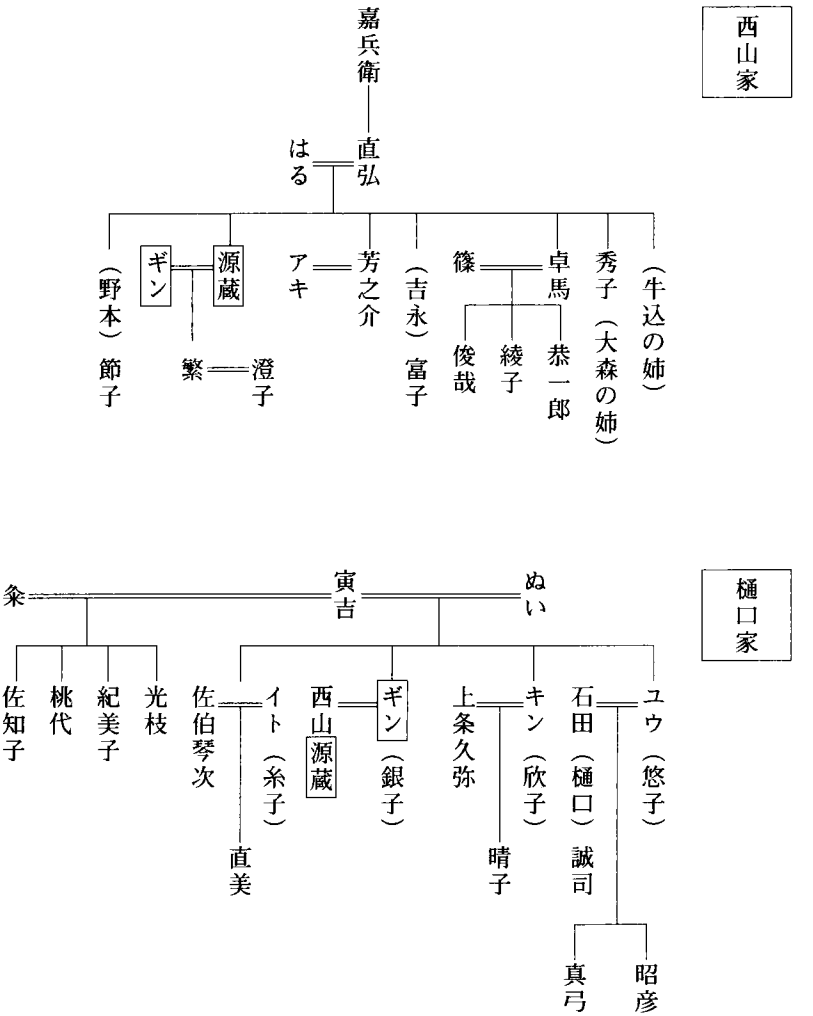
螢籠●目次

一　東京の「在」　7
二　棟梁の娘　32
三　新所帯　55
四　台北へ　80
五　気の迷い　102
六　その前後　122

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

七　親族会議　146
八　ふたりぼっち　171
九　遠きにありて　195
十　新宿「三越」裏　214
十一　髪　241

主な登場人物関係図


西山家
嘉兵衛
直弘
はる
（牛込の姉）
秀子（大森の姉）
卓馬
恭一郎
綾子
篠
俊哉
（吉永）富子
芳之介
アキ
源蔵
ギン
（野本）節子
繁
澄子
樋口家
寅吉
ぬい
粂
ユウ（悠子）
石田（樋口）誠司
昭彦
真弓
キン（欣子）
上条久弥
晴子
ギン（銀子）
西山源蔵
イト（糸子）
佐伯琴次
直美
光枝
紀美子
桃代
佐知子

螢

籠

螢籠昏ければ揺り炎(も)えたゝす　多佳子

一　東京の「在」

西山繁が母と永年住みなれた新宿の街なかから、ここ武蔵野の国分寺市へ移ってきたのは昭和四十五年のことである。これを機に翌年彼は十も若い澄子と結婚した。三十五歳だから晩婚もいいところであった。

それでほっとしたのか、母はかねて念願の稽古事に精を出して、四年ほど経った昭和五十年ごろに、竜生派華道教授の免許をうけて、湊月（みなづき）なる名前を貰った。ばかりか、ほぼおなじ時期に表千家不審庵から宗峰と名乗ることを許された。しかしだからといって積極的に弟子を取って賑やかに過ごすわけでもなく、頼まれて近所の娘たちに手ほどきをする程度で満足していた。以後、生け花にしろお茶にしろ、最後まで彼女の忠実な弟子で通したのは、妻ひとりであった。ふたりの子供を育てながらの弟子で、嫁としては已（や）むを得ない仕儀であったのだろう。

このほか母は書道や水墨画を習ったりしていたが、これはものにならなかった。多趣味といえば聞えはいいけれど、繁は尋常高等小学校しか出ていないコンプレックスの為せるわざと見てい

た。負けず嫌いは彼女の生きる発条だった。

それにしても、湊月とは凝った号だと思う。現在の地下鉄東西線・落合駅を利用するのが便利な東中野四丁目の生れで、海とも港とも縁のない彼女がそのような名前を頂戴したのは、おそらく直接のお師匠さんが銀子という名前から思い付いたからにちがいない。波静かな入江にのぞむひなびた湊町、その上に皓々と照る銀いろの月……。もしそうならお師匠さんはよほど風流を解する人だったといわねばなるまい。不審庵命名の宗峰のほうは、西山姓に合わせたふしがあるが、それでも雪を戴いた景色と無関係とはいえない気がする。

実は母の戸籍名はギンという。彼女はこれが大嫌いだった。明治四十二年に樋口寅吉の三女として生れているが、ひとつ上の姉がキンであることもあって、よけい憎んでいた。

そのことで一度親に噛み付いたと聞いている。キンとかギンとか、まるで山師の娘みたいではないか、学校友達には博子さんとか文枝さんのような子がいるのに、どうしてああいう名前にしてくれなかったのかと文句をいったところ、寅吉は言下に「ばかいえ。しがない大工の棟梁の娘に士族のお嬢さんのような名が付けられるか。それでなくとも、うちのお得意さんには華族さまや陸軍中将や財閥の大番頭さんがいらっしゃるんだ。そんな御大層な名前を付けてみろ、何と思われるかしれたもんじゃない」といって相手にしなかった。なんて気のちいさい――と、娘は心から父を軽蔑した。

寅吉と母ぬいの間には上からユウ、キン、ギン、イトと女ばかり四人つづいて、男がひとりもできなかった。ぬいはギンが十二歳のとき心臓病で急死したが、後妻にはいった粂も女ばかり四人も生んで、今度こそ大寅の跡取り息子を、とひそかに期待していた寅吉をがっかりさせた。彼

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

自身ぬいの入り婿だったから、よくよく男子に見放された家系といえた。

寅吉は妾に生ませた娘たちに光枝、紀美子、桃代、佐知子と名付けた。先妻の最後の子のイトと幼くして死んだ光枝は大正、あとは昭和生れで、佐知子にいたっては繁とひとつしか齢の違わない叔母ということになる。時代につれて名前にも流行廃りがあるとはいえ、大工の棟梁の娘という世間への憚りを棄てた父親にたいして、ギンには素直になれないものがあった。「なアに、時代のせいなもんか。あれは今度のおっ母さんの尻に敷かれて、言いなりになったまでの話さ」と以前繁に洩らしたことがある。

彼女が郵便物に銀子と署名するようになったのは、昭和九年に繁の父――西山源蔵と結婚したときからであった。父はギンを毛嫌いする妻にあきれたとみえ、「僕だって似たようなもんだよ。源蔵だなんて泥臭いもいいところさ。でも、おやじが尊敬する人の名を貰ったというんだから仕方がない。君がそんなに気に入らないんなら、せめて銀子とか吟子で通したらどうなんだ」と助言したらしい。ギンはそれに飛び付いたわけだが、吟子と当てるのは気取りがあって、さすがに自分の柄ではないと思った。そこで銀子に落ち着いたが、そのうちおかしなことに、すでに新宿三越裏の履物店に嫁いでいた次姉のキンが欣子という名で葉書をよこすようになった。そればかりか長姉のユウが悠子、末の妹のイトも糸子と変わった。

父の源蔵が生れた西山の家は、東京の「在」というべき中野の、もとは田圃や茶畑をもつ中地主だが、源蔵の祖父の嘉兵衛が周りに請われて中野村の村長になったのが機縁で今日まで四代、政治に関わっている。嘉兵衛は仕方なくであったのだろうが、村長、村会議長、初代中野町町長

と併せて二十四年間もつとめたらしい。そしてその嗣子の直弘――つまり源蔵の父は豊多摩郡の郡会議員を経て東京府会へ選出されている。

もっともギンが源蔵といっしょになったときには、直弘が世を去って六年経っており、すでに源蔵の長兄卓馬の代になっていた。家督を継いだはいいが莫大な相続税の支払いに窮して、卓馬はいまの東中野駅にちかい神田川沿いの屋敷を取り壊わし、九百五十坪の地所を分譲するつもりで、中野坂上に新たに居を構えた。それが昭和八年のことである。すでに彼は、前の年に中野区が誕生すると同時に区会議員になっていた。

若いころ放蕩の限りを尽くしたといわれる、この人物については、のちにもっと精しく触れることになろう。

父の源蔵は男三人、女四人のきょうだいの下から二番目で、末は女である。ほかに実は兄と姉をひとりずつ生れてすぐに亡くしているので、母方の樋口の家といい西山の家といい、ずいぶんと子沢山の血筋だと驚かずにはいられない。

西山姓を名乗る三人の男きょうだいのうち、次兄の芳之介は明治三十五年生れで、いまも健在である。西山はるの腹から出た九人きょうだいの唯一の生き残りである。十月の誕生日が来れば九十二歳になるという。三年前の母の葬式にはじまって、昨年の三回忌まで毎年法事のたびに従兄やその嫁に付き添われて菩提寺の宝仙寺に足を運んでくれたが、銀髪をきれいに撫でつけた鼻梁の高い上品な顔立ちと、背筋をぴんと伸ばしたしっかりした足取りには、親類縁者の誰もが舌を巻いた。この両三年わずかに認められる変化といえば、耳が遠くなってきたぐらいのものだろうか。

彼は大正七年、淀橋にあった日本中学を三年で退学すると「俺は勉強に向かない。そっちのほうは源蔵にまかせるよ」といって、伝手をたよって京橋の鋼材問屋へ奉公に出てしまった。源蔵とは五つ齢が離れているが、芳之介がそういったのは責任逃れからではなく、そのころ鉄鋼業界だけは、第一次大戦時の好況が去ったのちの深刻な不景気をまぬがれていて、いずれ独立しなければならない身なら、早いうちにその方面の実務を身に付けて将来に備えようと考えたからだ。

五年後、関東大震災が襲った。芳之介は二十一。二年間の丁稚奉公の年季はとうに明けて、すでに販売係として忙しく飛び回っていた。震災を境に世の中はガラリと変わった。とくに昭和にはいると、ほとんど慢性化した不況に慣れた東京の庶民は、モダンな文化を享受しようと銀座や浅草へ繰りだした。歌詞のなかにジャズ、ダンサー、丸ビル、地下鉄、シネマといった先端風俗語をちりばめた『東京行進曲』が一世を風靡したのは四年の五月ごろからである。

当時二十七、八の芳之介は結婚を間近にひかえていたはずで、朋輩とよく銀座へ飲みに出かけて独身最後の自由を謳歌していたらしい。とくにきものにエプロン姿の女給が接待してくれるカフェーがお気に入りで、酔って何度か「なァ、繁よ。カフェー・タイガーに行くとな、永井荷風が周りに女給たちをはべらせて、上機嫌でビールを飲んでいるところにちょいちょい出喰わしたものさ。どうやら先生、おさくという女が贔屓だったみたいだな」と、それこそ上機嫌で話してくれたものだ。おさくが芳之介に耳打ちしたところでは、荷風は毎月百五十円を前払いして遊んでいたという。ビールが一本四十何銭の頃にである。……もちろんこうした話を聞かせてくれたのはいまから二十年も前のことで、繁が文筆をもてあそぶ身と意識しての発言だった。

芳之介が私立中学を途中でやめたように、長兄の卓馬も市谷加賀町にあった府立中学を、これ

は放校になった。大学まで進んで何とか卒業したのは、男きょうだいのなかでは末弟の源蔵だけであった。立教大学の、いまはないと思うが商学部の出身である。但し繁の聞くところ、勉強なぞそっちのけで庭球部の選手生活を大いに愉しんでいた。もともと御苦労なしのお坊っちゃんタイプの青年だった。

現在繁の家には、父の顔を憶えていない息子のために母が疎開して残してくれたアルバムが数冊あるが、西山源蔵の学生時代を記録した写真の多くは、スポーツを通して知りあった友人たちとの親交ぶりを伝えるもので、合宿だ旅行だ銀ブラだと賑やかだ。そのなかに処分する前の屋敷うちで母親のはると妹の節子、嫂(あによめ)の篠と幼い甥っ子を撮ったのが、変哲もない庭の風景写真といっしょにお義理のように混じっているのは、カメラの被写体になる親しい家族がそれだけしかいなかったことを明かしている。東京府会の仕事で忙しい父はけむったいだけだし、何をしているのだか毎日家を出てゆく、ひと回り齢のちがう長兄とは気が合わず、廊下で擦れ違っても口も利かない。次兄は家を出ているし、姉たちは嫁に行ったり亡くなったりしている。カメラ好きでもあった源蔵にしてみれば、せいぜい築山や池に向けてシャッターを切るしかなかったのは当然かもしれない。

彼はひとつしか齢の違わない妹の節子をとくべつ可愛がっていた。玄関脇の袖垣を背に、島田に結って恥ずかしそうに写っている細面の彼女はなかなかの器量好しで、その頃はすでに日本女子大の学生だったと思う。彼女も源蔵を慕っていて、酔って夜遅く帰ってくる兄のために、親に内緒で通用門の桟をはずして置いてやったりした。

女きょうだいの上ふたりは篠やギンとおなじ桃園小学校卒だが、その下の早世した富子は跡見

女学校出で、節子ひとりひっつめ髪に銘仙のきもの、海老茶の袴という身なりで目白に通ったというのも時代のながれだろう。彼女はのちに三田出身の銀行員に嫁いだが、いつであったか繁に歌舞伎の劇評家になりたかったと洩らしたものだった。女学生の頃から初代中村吉右衛門のファンで、女子大にはいると友人とよく楽屋を訪ねたという。

そのとき出た話に、直弘のことがある。

繁が肖像写真で知る祖父は、髪を五分刈りにした面長の、濃い眉と口髭が印象的な謹厳そのものの風貌をしていて、長兄の卓馬を勘当するのを躊躇うような人物でないことを教えてくれるが、末娘から見た父親はそれとはまるでちがうようだ。節子にいわせれば、直弘は地方政治家にしては文人気質の勝った人で、書を能くし文章をつづるのを好んだ上に、長唄や新内、小唄などの芸事も玄人はだしであった。

節子が女学生だったある雪の日の午後、その日は日曜日でもあったのだろう、自分の部屋で火鉢に手をかざしながら、彼女は最前から表座敷から聞えてくる三味線の音と、父が語る浄瑠璃「明烏」のさわりの一節にうっとりと耳を傾けていた。

その日の朝、遅く床を離れた直弘は、縁側の硝子戸越しに築山や庭樹や石燈籠に降りつもる白皚々の雪景色を眺めて俄かに興を催し、雪見の宴を張ると言い出して、妻のはるにあちこち電話をかけさせて、気の合った遊び仲間と中野新橋の三味線に堪能な馴染みの芸者をふたり呼び集めたのである。客は雪が小降りになった午後一時ごろ、タクシーや人力車でやってきた。

それまではると女中は台所でてんてこまいし、節子も十二畳の座敷の掃除やら膳出しやら大火鉢の火おこしやらに駆りだされた。源蔵がいた記憶はない。招んだ顔ぶれから察して、酒よりも

芸事の自慢が目的とわかっていたので、邦楽に多少の嗜みのある彼女の躰はくるくる動いた。最初の客が現われたところで節子は奥に下がり、女中と簡単に昼食を取って東のはずれの六畳の自室に引き籠もった。母親は御飯をたべるどころではない。

ふだんめったに声の洩れてくることのない屋敷うちに、ひとしきり芸者の華やいだ声と男どもの陽気な声の応酬があって、やがてそれもぱったりと絶え、するうち三味線の撥音が鋭くひびいて、誰だろう、たぶん駅のむこうで料理屋をいとなむ橋本屋のおじさんと思われる人の声で、長唄「都鳥」の耳なれた出だしの文句が聞えてきた。素人のことだから巧かろうはずもないが、よく鍛えた張りのある声と三味線のひびきが、それでなくとも、つもる雪にいっさいの物音を消された邸内の静寂を、さらに深めるような気がした。

父の直弘が新内のひとくだりを披露したのはその二番あとであった。いつも静かな物言いをする人だけに、三味線を膝に戯れに小唄、端唄を口ずさむときには、それがなおのことよく徹る細い声になるけれど、浄瑠璃を語るとなるとそうはゆかず、引き絞るような高い調子になる。……いま節子が火鉢にあたりながら耳を澄ますのは、浦里・時次郎の心中物として知られる「明烏夢泡雪」の、金の尽きた時次郎なぞ思い切れと、遊女浦里が抱え主の手で雪の降りつむ庭樹にしばられて責められた挙句、ひそかに助けにきた時次郎と廓を抜け出し、死出の旅路につく最後のくだりである。

もちろん三味線は芸者が頼りで、へ世に有りたけの実情を、尽しつくして諸共に、死ね死なうとがほんになり、互に胸のうたがひも、晴れて未来へ女夫連れ、何んの心残らうぞと、笑顔に覚悟あらはせり――と無事におさめたとき、その哀切きわまる曲調の余韻に節子は胸がいっぱいに

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo